佳作

無償の愛

岐阜県 岐阜県立吉城高等学校二年　渡辺 夏帆

「なっちゃん、来てくれたんやよ。」
と祖母が話しかけると、曾ばあちゃんは、目を細めて、
「なつほかぁ、なつほかぁ。」
と車椅子から私のほっぺを撫でてくる。しわくちゃの笑顔が私の心を解してくれた。
「あんたに会いたいって言うもんで、おりが連れてきたんや。」
「そうか、どうやって来たんや。」
「おりが連れて来たの。」
「今は何処に行っとるの。」
「吉城高校に行っとるよ。」
「どうやって来たん。」
「何処行っとるの。」
と、数十秒で会話の記憶が飛んでしまい同じ会話が繰り返される。
曾ばあちゃんは、御年九十二歳だ。幼い頃から遊んでもらい大好きなのに、最近はご無沙汰していた。
「曾ばあちゃんに会いたいな。」
と、祖母に言うと、西瓜を噎せながら無表情で食べている動画を見せてくれた。
「感情を顔に出すことも少なくなってきたでね。それでも口に運ぶってことは、美味しいってことやね。」
と呟いた。その諦めたような物言いに無性に愛おしくて会いたくなった。その一週間後に、祖母の実家に連れて来てもらった。
今でこそ認知が入っているが、曾ばあちゃんの様子を見ていると、昔元気だった頃のことが次々と甦ってきた。孫や子や曾孫がいつ来ても良いように、常にアイスクリームが用意されていたこと。正月や盆に急に訪ねると「なーんにも用意しとらんのやさぁ」と、千円札を掌に握らせてくれたこと。いつも茶の間で鶴を折っていたこと。三角なら三角ばかりの同じ動作毎まとめて折るのが流儀。話をしていても手を空かせること無く動かしていたこと等をしみじみと思い出した。
また、いつだって、目の前に居る人のことのみを聞いて安心している感じの人だった。自分のことや愚痴は一切言わなかった。会えなくて見えない孫や曾孫が楽しく生きているか、ちゃんと食べているか、何をしているかが、ただただ知りたいのだった。そして、話の途中で「とっちんかんでごめんな」と機転を利かす利発さを持っていた。
夕食後、寝室まで曾孫に車椅子を押してもらうのが嬉しいらしくニコニコしていた。照明を付けて戸を開けた瞬間、圧を感じた。千羽鶴の覇気がすごい。慣れない空気に圧倒的な威圧感。囲まれることも見ることもない光景。眼前に端正に折られた千羽鶴の真っ赤な大群が飛び交っていたのだ。寝室の鴨居にぐるりと吊されている千羽鶴の壮観さ。折り鶴一個でも存在感が充分であるのに。あまりの迫力に「わー凄い」と喚声をあげると、祖母が「あんたが折った千羽鶴が凄いと言っとるよ」「誰が折ったの…」「あんたがおったんやさー」。この会話から、こんなに折った鶴のことを全部忘れてしまったんだと知り、目頭がジーンと熱く切なくなった。
千羽鶴は、十束以上落ちて回収したらしい。それでも五十束は吊されている。合計で六万羽になる。立派な芸術作品としての不思議な魅力が迫ってくる。まさに曾ばあちゃんの魂が折り込まれているようだ。温かい空気が流れていた。そんな中に介護ベッドやポータブルトイレ、紙オムツが、オモチャのように置かれていて、おとぎの世界を思わせた。
千羽鶴を折り始めたのは、六十歳で退職してからだそうだ。冬には畑仕事も無くて、ただジーっとしておられない性分で指くらい動かそうと始めたらしい。新聞の折り込み広告を七・五センチの四角に切って折り始めた。そのうちクリスマスの頃の新聞の折り込みは、明るい赤が多く気に入ってしまった。それ以後広告の赤い部分のみを、几帳面に物差しで測って切り取り集めて折ったということだ。
でも、なぜ、これほどまでに曾ばあちゃんは千羽鶴を折り続けたのだろう。背景には、終戦で感じた強い思いがあったのではないかと察する。戦中戦後の物騒な世に、苦しい生活を強いられその悲惨さに耐えてきた。だから子や孫には、こんな苦労はさせたくないという「愛」が、鶴に込められている気がする。子孫の代には戦争のない平穏な日常がくるよう願い、また、鶴の吉兆の力を信じて、きっと、ひたすら折り続けたに違いない。
私は、曾ばあちゃんに会うと優しさに包まれる。会いに来てくれた嬉しさから同じ言葉を繰り返す会話は、可愛くて仕方がないからだろう。あの鶴を折った手は、家族のために働いた母の手であり、子孫に「無償の愛」を注いだおばあちゃんの手である。愛おしくて美しい。また、こんなに華奢な体から愛情が波及し充電されるのか、私は前向きな気持ちになる。明日からもっと元気を出さなくちゃという気持ちが、ムクムクと湧いてくる。
「バイバイ。また来るな。」
「行ってしまうんや。」
「そうか。行ってしまうのか。」
「また来いよ。」
と、顔を手で覆い背けるようにしてすすり泣いている曾ばあちゃん。私に「無償の愛」の生き方を諭すかのように、別れる一瞬まで声をかけてくれる。この大好きな曾ばあちゃんとの限られた時間を、これからも大切に、大事にして過ごしたいと思った。